

氏名	やま した つとむ 山 下 勤
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学位記番号	文 博 第 97 号
学位授与の日付	平 成 10 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	文 学 研 究 科 哲 学 (イ ン ド 哲 学 史) 専 攻
学位論文題目	イ ン ド 伝 統 医 学 文 献 に お け る 個 体 論 —— Āyurveda における Śārīrasthāna の 研 究 ——

論文調査委員 (主査) 教授 徳永宗雄 教授 御牧克己 教授 井狩彌介

### 論 文 内 容 の 要 旨

アーユルヴェーダ (Āyurveda) と総称されるインド伝統医学の代表的な古典『チャラカ・サンヒター』(Carakasamhitā) は、アーユルヴェーダの「身体治療」(Kāyacikitsā) と呼ばれる内科的な部門に特に重きを置く医学書で、全8巻120章から成る。この『チャラカ・サンヒター』の第4巻「シャーリーラ・スターナ」(Śārīrasthāna) は、人間の身体構造についての解剖学的内容の記述や、人の誕生・成長についての胎生学的な解説が見られることから、これまでのインド医学史の研究者によって、「身体論」の巻として位置付けられてきた。しかしこの巻には、人間の「身体」についての医学的な論述と並んで、精神的な要素を含む、アートマンについての哲学的な論議や、人間と世界との関係について、人間を形成する様々な要素・要因について、死について、さらには輪廻と解脱についてなど、「身体」だけにはとどまらない人間存在に関する多面的な内容の教説も展開されている。これら形而上学的内容の記述と医学的な論述との整合性が、常に研究者の間で問題とされてきた。

本論文は、このような『チャラカ・サンヒター』「シャーリーラ・スターナ」全8章を、1つのまとまりのある「人間(個体)論」として新たに読み直し、その意義を考察することによって、アーユルヴェーダ文献に示された、古代インドのいわば医学的な人間観を理解しようとする試みである。

本論文第1部第1章では、『チャラカ・サンヒター』「シャーリーラ・スターナ」各章の構成・内容を明らかにし、各章で展開されている教説の意図、目的を解明し、『チャラカ・サンヒター』「シャーリーラ・スターナ」全章の意義について考察した。その結果の概要は次の通り。

『チャラカ・サンヒター』「シャーリーラ・スターナ」各章の内容は、哲学的な人間観(第1章)、胎生学的な視点からの人間の誕生について(第2, 3, 4章, 第6章後半)、人間の身体要素について(アーユルヴェーダの生理学理論)(第6章前半)、人間と世界との関係、輪廻と解脱について(第5章)、人間の身体構造について(第7章)、産科的および社会的な視点からの人間の誕生と成長について(第8章)である。第8章を除く全ての章には輪廻と解脱について触れる箇所が見られた。ここで問題とされているのは一貫して、個体としてのアートマン(人間)であり、一つの有機的全体としてのまとまりをもつ生命体の生と解脱(死)についてであると言える。具体的には、ひとつのアートマンが前生の身体から出て、新たな受精卵(bīja)に入って5大元素を受け取り、母親からのもの、父親からのものなど、様々な構成要素からなる新たな身心を得て、母胎中でいくつかの段階を経て成長し、やがて多くの身体部位をそなえたひとりの人間として誕生し、バラモン社会の中で周囲の人々の庇護の下に成長し、成年に達し、やがて輪廻からの解脱を希求しつつ死を迎える、というような、個体としてのアートマンの生の諸相が『チャラカ・サンヒター』「シャーリーラ・スターナ」で明らかにされているのである。この巻のタイトルが「身体」(Śarīra-)でも「アートマン」(Ātma-)でもなく、Śārīrasthāna とされているのは、このような有機的全体としての個体についての教説を意図しているものと解釈し得る。また、『チャラカ・サンヒター』よりも古い段階の内容を保存している可能性がある『ベーラ・サンヒター』(Bhelasamhitā)「シャーリーラ・スター

ナ」の構成・内容も、これにきわめてよく似たものであり、1つのまとまりのある個体論としての性格をそなえていることから、『チャラカ・サンヒター』『シャーリーラ・スターナ』は、そのテキスト成立のかなり早い段階から現在見られるような内容のものであった可能性が高い。さらに、『チャラカ・サンヒター』には、他の巻にも、哲学的な論議や社会的な慣習を含む当時の人間生活の様々な局面についての記述が多く含まれていることから、『チャラカ・サンヒター』に見られるアーユルヴェーダは、本来、単なる医学医術に留まらず、人間存在を様々な観点から理解することをめざすものであったと見なし得る。

本論文第1部第2章では、第1章でその概要と意義を示した『チャラカ・サンヒター』『シャーリーラ・スターナ』の個体論としての内容が、かなり忠実に古代インドの法典『ヤージュニャヴァルキヤ・スメリティ』(Yājñavalkyasmṛti) 第3巻 *Yatidharmaprakaraṇa* の一部に取り入れられていることを、両文献のテキストの言語表現と内容の詳細な比較を通じて明らかにし、『チャラカ・サンヒター』『シャーリーラ・スターナ』の個体論がアーユルヴェーダ以外の学問領域に与えた影響の一つと見なし得ることを明らかにした。またこの事実から、アーユルヴェーダ文献と法典の作者たちとの親近性について指摘した。

アーユルヴェーダには伝統的な人物であるアートレーヤ (*Ātreya*) とダンヴァンタリ (*Dhanvantari*) をそれぞれの主導者とする2つの系統があったことが知られている。このうちアートレーヤの医学派は、インド西北部で起こり、薬物療法、養生法など主に内科的な治療を専らとしていたものであり、これに対してインド中東部で成立したダンヴァンタリの医学派は、いわゆる外科治療に重きを置いていたものである。

長い時間と様々な発展経過をたどって体系化された古代インドの医学・医術は、それ自体極めて複雑な構造を持っており、仮説的な、あるいはほとんど観念的のさえ言えるいわゆる「3要素 (*tridoṣa*) 説」と呼ばれる独特な病理学説を発展させ、これを最も重要な基礎理論として奉じる一方、他方では病の場である人体の構造を実証的に認識するために、ダンヴァンタリ学派では屍体解剖という手段も取り入れていた。また臨床面では、それぞれの専門分野に長じた医者達が存在しており、それぞれの流儀による医療活動を展開していたと考えられる。

現存するサンスクリット医学文献のうち、アートレーヤ学派を代表する最も古く、まとまった文献は『チャラカ・サンヒター』であり、ダンヴァンタリ学派のそれは『スシュルタ・サンヒター』(*Suśrutasaṃhitā*) である。また、アートレーヤ学派には『ベーラ・サンヒター』(*Bhelasamhitā*) という文献が不完全な形ながら現存している。

本論文第1部第3章では、これら3文献それぞれの「シャーリーラ・スターナ」のうちの「身体の数」(*śarīrasaṃkhyā*) の章について、特に『チャラカ・サンヒター』を中心にその内容を紹介しながら、アートレーヤ学派とダンヴァンタリ学派の医学文献に見られる解剖学的知識を比較し、それぞれの特徴を明らかにした。その結果の概要は次の通り。

ダンヴァンタリ系の『スシュルタ・サンヒター』は自らを「外科の論書」(*śalyatantra*) と想定する通り、特に第1巻「ストトラ・スターナ」(*Sūtrasthāna*) や第4巻「チキツァー・スターナ」(*Cikitsāsthāna*) で、外傷や腫瘍などに対する、切開、切除、縫合といったような外科的な治療法 (*śastrakarman*) についての具体的な詳細な記述が目立つが、一方、アートレーヤ系では一部を除いて、外科的な治療法についての言及はあまり見られない。解剖学的知識における両学派の相違は、このような臨床的側面における両学派の特徴をそのまま反映するものと考えられる。すなわちインドの医学においては、解剖学的知識は固定的なものであったのではなく、臨床経験が蓄積されるにつれて、解剖学的知識も質、量ともに向上し、それがこのような形で記述され保存されたものであろう。それが最も顕著に現れているのは靭帯、脈管類、筋、関節に関する両派の違いである。ダンヴァンタリ系の医者達は、これらの部位についてはアートレーヤ系よりもはるかに多くの臨床的な経験があり、またこれらの部位の損傷を治療するために、実際に屍体を解剖して各部位について正確に認識することが、彼らには必要だったのであろう。そしてこのような治療経験を通じて急所 (*marman*) についての独特の、詳細な説を生むに至ったと考えられる。これに対してアートレーヤ系の医者達は、これらの部位についての直接的な臨床経験はあまり多くはなく、また、これら各部位についての詳細な知識を必要としないような治療方法を主に用いたのではないかと考えられる。

古代インドにおいては、既にヴェーダ文献中に身体部位や骨、内臓についての記述が見られ、また初期仏教文献中にも解剖学的な記述がまとまって現れる部分があることから、人体の解剖学的知識についてはかなりの蓄積が古くからあったことがわかる。これらの知識は、たとえば病を扱うための呪術的なものや、ヴェーダ祭式のなかの供儀に伴うもの、また宗教的

な教説に関わるものなどがほとんどである。このような記述と、以上に見たような医学書の解剖学的記述とを比較すると、その語彙には共通のものが多いことなどの理由から、医学書がこれらの伝統に負っている部分も少なくはないとされている。しかし、体系化された医学文献中のこれらの身体についての記述は、それが病や傷を癒し、長寿を得ることを目的とする医学・医術にとって不可欠な基礎的知識、すなわちいわゆる「解剖学」として自覚されていたという点を見落としてはならない。

『チャラカ・サンヒター』以外のアーユルヴェーダの古典的なテキストのうち、『ベーラ・サンヒター』(Bhelasamhitā), 『スシュルタ・サンヒター』(Sūśrutasaṃhitā), 『アシュターンガフリダヤ・サンヒター』(Aṣṭāṅgahrdayasaṃhitā), 『アシュターンガ・サングラハ』(Aṣṭāṅgasamgraha), 『カーシャパ・サンヒター』(Kāśyapasaṃhitā)という5つの文献にも、それぞれ「シャーリーラ・スターナ」(Śārīrasthāna)という名の巻が含まれている。これら5つの「シャーリーラ・スターナ」にも、『チャラカ・サンヒター』「シャーリーラ・スターナ」と同様に、人間の身体構造、誕生・成長などについての記述が見られる。しかし、各「シャーリーラ・スターナ」には、それぞれの文献の専門分野の違いや、各テキストの成立事情および成立年代の違いなどが反映されており、必ずしも全ての「シャーリーラ・スターナ」が『チャラカ・サンヒター』に見られるような1つのまとまりのある个体論として解釈できるとは限らない。本論文第2部では、これら5文献の成立について、今日までに明らかになっている事実を紹介し、各文献の全巻の構成を概観した後、それぞれの「シャーリーラ・スターナ」の概要を示し、『チャラカ・サンヒター』のそれと比較し、それぞれの文献の特殊性について考察した。その結論の概要は次の通り。

『チャラカ・サンヒター』以外の5種の文献に見られる「シャーリーラ・スターナ」のうち、『ベーラ・サンヒター』と『カーシャパ・サンヒター』のテキストは、欠落部分が多いものの、ほぼ『チャラカ・サンヒター』「シャーリーラ・スターナ」と同じ構成をもつものであり、その内容に関しても、ある程度まとまりのある个体論を意図したものであると推測できる。

『スシュルタ・サンヒター』「シャーリーラ・スターナ」には、『チャラカ・サンヒター』と同様に、哲学的なプルシャ(アートマン)に関する記述(第1章)、胎生学的な記述(第2, 3, 4章)、解剖学的な記述(第5, 6, 7, 9章)、出産・育児に関する社会的な習慣を含む具体的実践的な記述(第10章)が見られ、各章の配列の順序もよく似ている。しかし、『スシュルタ・サンヒター』「シャーリーラ・スターナ」には、外科的な医術を専門分野とする医学書としての性格が反映されて、解剖学的な内容の解説に重点が置かれており、瀉血に関しての臨床的な内容の章(第8章)も含まれている。したがって、『スシュルタ・サンヒター』「シャーリーラ・スターナ」の場合も、その内容については、人間(个体)論を意識したものと見られるものの、全体としては首尾一貫したまとまりをもつものとはなっていない。

『アシュターンガフリダヤ・サンヒター』と『アシュターンガ・サングラハ』の「シャーリーラ・スターナ」は、『チャラカ・サンヒター』と『スシュルタ・サンヒター』の「シャーリーラ・スターナ」および『チャラカ・サンヒター』第5巻「インドリヤ・スターナ」の内容を取り入れ、新たな構想の元に編集された実用的臨床的な医学書としての性格をもったものである。この両文献の「シャーリーラ・スターナ」は、純粋に医学的な内容の記述だけで構成されており、『チャラカ・サンヒター』と『スシュルタ・サンヒター』にあるようなプルシャ(アートマン)などに関する形而上学的な論議は見られず、もはや个体論としての意図を読みとることはできない。したがってこの両文献に関しては「シャーリーラ・スターナ」(Śārīrasthāna)は、単なる「身体論」と見なすべきである。

このような「シャーリーラ・スターナ」の内容の変遷は、主にそれぞれの文献のもつ特殊性によるものと考えられるが、アーユルヴェーダという一つの学問領域が、時代が下がるにつれて、その専門性を高め、医学医術としての性格をより強化していく過程を示すものとして理解することも可能であろう。

以上、本論文はアーユルヴェーダ文献に見られる「シャーリーラ・スターナ」の内容をもとに、インド伝統医学における人間観とその変遷を明らかにした。なお、本論文第1部には『チャラカ・サンヒター』「シャーリーラ・スターナ」全8章の和訳を付した。

## 論文審査の結果の要旨

正統バラモン教と仏教の思想が、恒常なアートマン（「自己」）の有無をめぐる基本的に対立することから明らかなように、アートマン論はインド思想史上最大のテーマを成すといつて過言ではない。このようなわけで、アートマン論に関してはすでに、仏教学者を含むインド思想史研究者による膨大な研究業績が蓄積されている。しかし、これらの業績の大半は、ウパニシャッドを中心とする古代インドの思弁哲学や、紀元後に諸哲学派で展開されるアートマン論を主たる研究対象としており、思弁哲学と並んで、古代インドで高度な発達を見る実学や自然科学の文献を用いて、アートマンないしはアートマンを中核として成り立つ個体（人間）の本質を論じた研究書は極めて少ない。科学文献のうちアートマン論との関係で特に重要なのが、病気の原因を解明しその治療を目的として編纂されたインド伝統医学文献であるが、医学文献の研究はこれまでどちらかといえば医学史研究家の仕事と見なされ、インド思想史の研究者が医学書に説かれる理論と臨床を十分踏まえて、医学書の人間論を本格的に扱う仕事はまだ殆ど為されていないのが実状である。このような状況の下、山下氏はこれまでインド伝統医学を思想史の観点から本格的に研究するパイオニアの作業に取り組んできた。本論文『インド伝統医学文献における個体論』は、同氏がこれまでに蓄積してきた研究成果を新たに得た知見のもとに集大成したものであり、インド伝統医学書に見られる個体論（人間論）を思想史的観点から初めて本格的に論じた業績として注目に値する。

本論文の主要な資料『チャラカ・サンヒター』は、アーユルヴェーダの名で総称されるインド伝統医学の代表的古典の一つであるが、その第4巻「身体論の巻」（シャーリーラ・スターナ *Śārīrasthāna*）には、身体考察、人間の誕生に関わる胎生学等と並んで、生命体の中核を成すアートマンについての哲学的考察や、人間と世界との関係、さらには、死や輪廻、解脱が論じられている。従来、この巻はインド医学史研究者によって単なる「身体論」として片付けられる傾向があったが、山下氏は本論文第1部第1章で、サーンキヤ学派やヴァイシェーシカ学派など、正統バラモン教の主要な哲学思想を視野に入れて同巻を精読し、この巻は単に身体の発生と構造を経験的に考察することを目的として編纂されたのではなく、一つのアートマンが前世の身体から出て新たな受精卵体に入って諸元素と結びつき、母胎内でいくつもの段階を経て成長した後身体部位を備えたひとりの人間として誕生し、バラモン社会の中で人々の庇護の下に成長し、成年に達し、輪廻からの解脱を希求しつつ死を迎えるプロセス、つまり、個体としてのアートマンの生の諸相を医学的観点から解説することを意図していることをはじめて明らかにした。

本論文第1部第2章は、前章で論者がその概要と主題を解説した『チャラカ・サンヒター』「身体論の巻」と古代インド法典『ヤージュニヤヴァルキヤ・スメリティ』第3章の一節（*Yatidharmaprakaraṇa*とも呼ばれる）との比較がテーマとなっている。論者は法典のその節に『チャラカ・サンヒター』「身体論の巻」と酷似する描写があることに注目し、両テキストの表現と内容の子細に検討した結果、『チャラカ・サンヒター』「身体論の巻」が『ヤージュニヤヴァルキヤ・スメリティ』第3章に部分的に未消化なカタチで取り込まれていることを明らかにした。この事実、これまで異質のものと思われてきた医学と法典の伝統の間に明らかに接触があったことを示す事例として興味深い。

インド伝統医学アーユルヴェーダには、伝説的な人物であるアートレーヤとダンヴァンタリをそれぞれ主導者とする二つの系統があったことが知られている。そのうち、本論文の主要テキストである『チャラカ・サンヒター』は前者の系統を代表し、後者の伝統はもう一つの代表的な医学文献『スシュルタ・サンヒター』に受け継がれている。本論文第1部第3章で論者は、これら二つの医学伝統の相違を念頭において両文献の「身体論の巻・身体（構成要素）の数に関する章」に見られる解剖学的知識を詳細に比較し、臨床医学に関して内科的傾向を示すアートレーヤ派と、治療法として切開、切除、縫合といった技術を用い、外科的傾向を示すダンヴァンタリ派が、身体理論の面においても、同様の対称的性格を有することを確認した。また、第1部末尾には『チャラカ・サンヒター』「身体論の巻」全8章の和訳が脚注とともに付されている。

本論文の研究対象である「身体論の巻」は、『チャラカ・サンヒター』以外の古典的な医学文献のうち、『ペーラ・サンヒター』、『スシュルタ・サンヒター』、『アシュターンガフリダヤ・サンヒター』、『アシュターンガ・サングラハ』、『カーシャパ・サンヒター』の5文献にも含まれている。本論文第2部で論者はこれら5文献の成立についてこれまでに明らかになった知見を紹介し、各文献の全巻の構成を概観したのち、「身体論の巻」の通文献的考察を行っている。5文献の「身体論の巻」を『チャラカ・サンヒター』のそれと比較することによって、論者は同巻に説かれる個体論（人間論）の時代的変容に

注目し、アーユルヴェーダという学問領域において、个体論（人間論）が時代が下がるにつれて専門度を高め、医学・医術としての性格を強化する反面、アートマン論としての哲学的性格を次第に失っていった事実を指摘している。

本論文はアーユルヴェーダに関する主要な文献を網羅して、インド伝統医学文献の「身体論の巻」とそこに説かれる个体論（人間論）を、さまざまな角度から考察したものであり、「身体論の巻」に関するこのようにスケールの大きな研究は国内はもとより海外でも前例を見ない。論者がインド伝統医学思想史の若手研究者として国内外から注目されている所以でもある。ただ、本論文にも問題がないわけではない。まず、論者が医学文献を思想史的に考察する際、古代インドの諸哲学派、中でも人間論と関わりの深いサーンキヤ学派の思想の理解に未熟さが認められ、今後克服すべき課題として残された。また、サンスクリット和訳に厳密さを欠く部分が目につくが、本論文の価値を著しく損なうものではない。

平成10年3月5日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果、本論文を博士（文学）の学位論文として十分価値あるものと判断し、合格と認めた。